

明治中・後期における郷土史談・郷土誌・郷土地理歴史（2）

—中国・四国・九州地方の郷土史教科書—

木全 清博

1 明治10年代までの郷土地誌と郷土史の教育

明治初期において郷土に関する教育は、郷土地誌の地理教育を中心に行われた。文部省は「学制」公布直後の1872（明治5）年9月8日に「小学教則」を制定して、下級小学の「地学読方」では日本地誌や外国地誌（万国地誌）を重視した¹。また、「単語読方」で近世の往来物からの流れを引く「地方往来」を、「地学輪講」は「地学事始」を教科書にあげている。上級小学の「地学輪講」では万国地誌である「輿地誌略」をあげている。1873（明治6）年5月に「改正小学教則」を発表して、教科配当時間を改め教則概表も改めたが、教則そのものはほとんど変わっていない。

しかしながら、『文部省第2年報』1874（明治7）年以降の「小学書籍一覧表」には、郷土地誌の教科書が多数掲載されており、郷土地誌教育がこの時期に展開されていたことを窺わせる²。1874（明治7）年には『遠江国地誌小成』、1875（明治8）年には『秋田県地誌略』と『下野地誌略』が発行されている。1876（明治9）年発行の『置賜県管内地誌略さとのしらべ』は、「往来物から地誌略への過度期を示す」といわれる教科書である³。1876（明治9）年の『文部省第4年報』には、地理教科書23種類のなかに、『愛知県地理誌』、『静岡県誌』、『山口県地誌略』、『愛媛県地誌略』、『秋田県地誌略』の5種の府県別地誌がある⁴。1877（明治10）年の『文部省第5年報』には、11種類の府県別・国別地誌が掲載されている。前年の愛知・山口・愛媛・秋田に加えて、『埼玉県地誌略』、『上野地誌概略』、『茨城県地誌略』、『橡木県地誌略』、『甲斐地誌略』、『岐阜県地誌略』、『紀伊国地誌略』である⁵。万国地誌に代わって、府県別や国別の郷土地誌教科書が盛んに発行されたのは、『文部省第5年報』によれば、全国一律の教則に即して地理教育を行うのではなく、「土地民情ノ適不適」に合わせた教育が必要であったか

¹ 「小学教則」文部省布達番外 1872年9月8日、「改正小学教則」文部省布達第76号1873年5月19日（『明治以降教育制度発達史』第1巻 教育史編纂会 教育資料調査会 1938年初版 1997年再刊 龍吟社 397～441頁）。

² 文部省『文部省第2年報』（1874<明治7>年）。

³ 仲新『近代教科書の成立』復刻版（日本図書センター 1981年）旧版1949年273頁。

⁴ 『文部省第4年報』（1876<明治9>年）。

⁵ 『文部省第5年報』（1877<明治10>年）。

らである。「各地方管内ノ風土物件ヲ編成シテ之ヲ誦習セシメ」ることで、少しでも地方の小学校の就学率をあげていくためであった。

1878（明治11）年の『文部省第6年報』には、地理教科書36種類のうち22種類の郷土地誌教科書が確認される。22種類の府県・国別地誌教科書の地域分布は、次のようである。東北地方で『秋田県地誌略』、関東地方で『上野地誌略』、『栃木県地誌略』、『埼玉県地誌略』、『茨城県地誌略』、『東京府地誌略』の6種、中部地方で『新潟県管内地誌略』、『甲斐地誌略』、『静岡県地誌』、『愛知県地理誌』、『岐阜県地誌』の5種、近畿地方で『三重県地誌略』、『京都府管内地理』、『滋賀県管内地理書』、『紀伊国地誌略』の4種、中国・四国地方から九州地方では『土佐国地誌略』、『阿波国地誌略』、『安芸国地誌略』、『備後地誌略』、『出雲国地誌略』、『山口県地誌略』、『熊本県地誌』の7種である⁶。

1879（明治12）年以降において、郷土地誌教科書は府県別・国別教科書の発行が一層増大していき、さらに郷土の範囲を狭めて郡市・町村別の教科書が発行されていった。1879（明治12）年9月の「教育令」、翌1880年の「改正教育令」により、地域の実情に即した教育が提起され、教科内容に部分的に採用された。1881（明治14）年5月の「小学校教則綱領」で、「生徒の目撃しうる学校近傍」から始め、次に郷土地誌を学ばせ日本地誌へ、次に万国地誌へと学ばせる地理教育となったからである⁷。

このような地理教育に対して、歴史教育での郷土史教育はどのような状況であったのだろうか。1872（明治5）年の「小学教則」での歴史教育は、上等小学の「史学輪講」で「王代一覧」「国史略」などの日本歴史の教科書名を、「万国史略」「五洲記事」などの外国史（世界各国史＝万国史）の教科書名をあげており、日本史と万国史の歴史教育を行うとした。1873（明治6）年5月の「改正小学教則」で改称した「歴史輪講」でも、上記4種の教科書名があげられてこの方針が踏襲された。ここには郷土史の教育方針は示されていない。

しかし、国立国会図書館デジタルライブラリーには、1877（明治10）年に『東京誌略』、1879（明治12）年に『小学岡山県三国誌』、『愛媛略史』、1880（明治13）年に『小学美作史略』、『出雲史略』、1881（明治14）年に『千葉県史略』などの生徒用の郷土史教科書の発行が確認できる。教師用では、岡山県^{ひぜんりやくし}『備前略史』1877（明治10）年と『美作略史』1881（明治14）年、山口県史略』巻1～6 1881～83（明治14～16）年、『校正鹿児島外史』巻1～5 1885（明治18）年などが発行されている。文部省の歴史

⁶ 『文部省第6年報』（1878<明治11>年）。

⁷ 「小学校教則綱領」文部省達第12号 1881年5月4日（前掲『明治以降教育制度発達史』第3巻56頁）。

教育の方針もあって、郷土地誌に比べて郷土史教科書の発行は少なかった。発行した府県にも偏りが大きく、岡山県は備前・美作の旧国別で3種を刊行している。全国的にみると西日本の中国・四国・九州地方の郷土史教科書の発行が目立つ。

明治中・後期の郷土史教科書の刊行の背景は、1891（明治24）年11月17日の文部省令「小学校教則大綱」によって、高等科で「郷土の史談」より日本歴史を教えると規定されたことによるものであった。各府県は小学校教則を改正していき、師範学校教員や民間の有識者は、郷土史談・郷土誌などの教科書多数を編纂・著作していった。

前稿では、近畿地方と中部地方における郷土史教科書の発行状況を概観し、愛知県を事例にして郷土史の構成と内容を検討した⁸。本稿では、西日本の中国・四国・九州地方における郷土史の発行時期、郷土史内容の特質を検討する。検討対象の郷土史教科書は、国立国会図書館デジタルライブラリー本を中心にして、東京書籍所蔵本（東書本）、国立教育政策研究所教育図書館所蔵の近代教科書アーカイブ本（国研本）を取りあげる。以下の表1～4では、東書文庫本を（東書）、国立教育政策研究所所蔵本を（国研）と略記する⁹。郷土の範囲を府県（旧国）レベルと郡市（町村含む）レベルに分類し、使用対象で生徒用と教師用に分けてみる。教師用と一般用では境界が難しいが、内容によって判断した。なお、近年では都道府県立図書館でも郷土史資料のデジタルアーカイブが進められ、以下の表にさらに多くの郷土史教科書が付け加えられる可能性がある。

最初に西日本の中国地方、四国地方、九州地方における郷土史教科書の発行年順一覧を表1に示す¹⁰。

表1 西日本の3地方（中国・四国・九州地方）の郷土史教科書（発行年順）

	府県レベル	郡市レベル
「中国地方」		
1893（明治26）	『防長史談』巻1・2 山口	『郷土史談小学校生徒用』広島尾道
	『防長歴史談』山口（東書）	『小田郡地誌』岡山笠岡
	『岡山県歴史』（東書）	『都宇郡誌』岡山都宇郡
1894（明治27）	『岡山県地理歴史（国研）	『高等小学地理歴史』広島福山

⁸ 木全「明治中・後期における郷土史談・郷土誌・郷土地理歴史—近畿地方と中部地方の郷土史教科書—」『歴史教育史研究』第18号 2020年12月。

⁹ 『東書文庫所蔵 教科用図書目録』第2集（東京書籍株式会社 1981年）—明治検定期教科用書「地方史」、国立教育政策研究所教育図書館の近代教科書アーカイブ「郷土地理」。

¹⁰ 以下での府県、郡名のふりがなは、土橋荘著『下等小学日本地誌略図問答 附諸射図 山陰山陽南海西海道之部』（京都・石田文華堂 1876<明治9>年）に依る。各府県の沿革略譜については、保科保編輯『地方沿革略譜』内務省図書局（報告社 1882<明治15>年）参照。同書は内閣文庫所蔵、府県資料・マイクロフィルム版の翻刻印刷（1963年 雄松堂フィルム出版有限公司）。

	『芸備史談』 広島(国研)	
	『広島県郷土史談』 生徒用・教師用	
	『小学校用島根県地誌史談』 (国研)	
	『岡山県地理歴史』 (国研)	
1895 (明治 28)	『芸備地理歴史』 広島(国研)	『安芸国豊田郡町村沿革誌』 広島 『岡山県浅口郡柏崎村誌』 岡山
1896 (明治 29)	『広島県歴史』	
1897 (明治 30)	『芸備地理歴史』 (国研)	『知夫村沿革誌』 島根隠岐郡
1898 (明治 31)	『広島県史談』 (東書・国研)	
	『広島県地理史談』 (国研)	
1899 (明治 32)	『岡山県地理歴史筆記代用』	
1901 (明治 34)	『小学岡山県地誌』 (国研)	『高田郡地理歴史大要』 広島 『能義郡史談』 島根能義郡 『野波邑地誌』 島根八束郡
1903 (明治 36)	『因幡国史談』 鳥取	
1904 (明治 37)	『岡山県誌』	
1906 (明治 39)		『後月郡誌』 岡山
1907 (明治 40)	『因伯記要』 鳥取	
「四国地方」		
1891 (明治 24)	『阿波国文明小史』 徳島	
1892 (明治 25)	『郷土史談小学阿波国史』 再版徳島	
1893 (明治 26)	『小学校用土佐史要』 上・下	
1894 (明治 27)	『愛媛県史談生徒用』 赤松三代吉(国研)	
	『土佐国史談』	
	『高知県史談』 (東書)	
1896 (明治 29)	『愛媛県史談生徒用』 宮脇通赫	
1898 (明治 31)	『阿波国史談』 (東書)	『西讃府志』 香川西讃岐
1899 (明治 32)	『香川県地誌小学校用』	『佐馬地村三好郡史』 徳島
1902 (明治 35)	『愛媛県地理歴史』 (国研)	
1905 (明治 38)		『東宇和郡地理歴史』 愛媛
1908 (明治 41)	『郷土地理歴史教授資料』 徳島	
	『徳島県誌略』	
	『土佐紀要』	

1909 (明治 42)	『香川県史』	『温泉郡誌』 愛媛
1910 (明治 43)	『愛媛県誌』	
「九州地方」		
1891 (明治 24)		『中津歴史』 大分中津町
1893 (明治 26)	『長崎小史』	『速見史談』 大分速見郡
1894 (明治 27)	『肥後史談』 熊本 (東書)	『日田歴史』 大分日田郡
1895 (明治 28)	『鹿児島県史談』 波多市松 (国研)	『郷土史談』 大分日田郡 『日田郡歴史』 同上
1896 (明治 29)	『訂正鹿児島県史談』 鹿児島 私立教育会 (東書・国研)	『郷土史談』 大分宇佐郡
1898 (明治 31)	『教科用書福岡県史談』 再版 (東書・国研)	
1899 (明治 32)	『豊前志』 福岡 『南島沿革史論』 沖縄	
1900 (明治 33)	『佐賀県誌』	
1901 (明治 34)	『郷土史誌』 福岡	
1902 (明治 35)		『豊後御越町志』 大分速見郡
1903 (明治 36)	『肥後国史略』 熊本 『筑前志』 福岡	
1906 (明治 39)	『福岡県全誌』	
1907 (明治 40)	『校訂筑後志』 福岡 『長崎県紀要』 『豊国小史』 大分	
1910 (明治 44)	『琉球史の趨勢』 沖縄	

2 明治中・後期の中国地方の郷土史教科書

表2から中国地方の郷土史教科書は、岡山県と広島県は府県(旧国)レベル・郡市町村レベルとも多種類が発行され、山口県、鳥取県、島根県は府県・郡市町村レベルとも1～2種しか確認できない。岡山県は府県レベル5種・郡市町村4種(小田郡笠岡・都宇郡・後月郡・浅口郡柏崎村)で、9種すべてが生徒用であった。広島県は中国地方で最も多種類の郷土史発行が見られ、府県レベル8種・郡市町村レベル4種(尾道・福山・豊田郡・高田郡)の12種が確認できた。中国地方では最も多数の郷土史教科書の刊行であり、広島県を冠する5種・旧国名の芸備を冠する3種であった。このうち生徒用が11

種とこれも中国地方で最多数で、教員用は1種であった。この2県に比して、他の3県は発行本が少なく、山口県は府県レベルのみ2種、生徒用・教員用各1種であり、島根県は府県レベル1種・郡市町村レベル3種（隠岐郡知夫村・能義郡・八束郡野波村）のいずれも生徒用4種にとどまり、鳥取県は府県レベルの教師用2種のみであった。

中国地方5県の郷土史教科書は、府県レベル18種・郡市町村レベル11種の総計29種で、生徒用25種・教師用4種が確認できた。中国地方では生徒用が他地方と比べて多数発行されている。国会図書館本以外の郷土史教科書では、中国地方の東書文庫本として『岡山県歴史』『広島県史談』『広島県郷土史談』『訂正芸備史談』『防長歴史談』の5種があり、国研のみの所蔵本として『岡山県歴史』『小学岡山県地誌』『高等小学地理歴史』（広島・福山）『芸備地理歴史』の4種があった。

岡山県は、明治10年代にすでに備前国、美作国の史略や略史を発行していた。明治中・後期は『岡山県歴史』1893（明治26）年と『岡山県地理歴史』1894（明治27）年の2種が発行されたが、明治10年代の刊行教科書が使用されていた可能性が高い。岡山県はこの時期には郡市レベルの郷土史の発行が盛んで、小田郡・都宇郡・浅口郡の地誌と史談が発行されている。『小田郡地誌』は1893（明治26）年に私立小田郡教育会から刊行され、高等小学第1学年用並尋常小学補習科の郷土地理、歴史教授用に編集された。『都宇郡誌』も同年発行で、「学校近傍の地理から郷土の地理歴史」を教えるため、都宇郡の統計書、郡誌村誌、荘官所蔵の旧記、古老の口碑から材料を求めて編纂している。『岡山県浅口郡柏崎村誌』では、著者中塚一郎が「地誌は、小は県一国より大は世界万国に及ぼす、国より宜しくすべし。而して未だ一町一村の地理沿革を細（マ採）録したるものなし、之を近小に失すというべし」と述べている。『岡山県地理歴史 筆記代用』は、勝北・勝南両郡内の高等小学校第1学年用の郷土地理歴史に関する筆記本で学習帳であった。

広島県は、府県レベルの8種類の発行、郡市レベルの尾道・福山・高田郡・豊田郡の4種が確認できる。内容構成にそれぞれ独自性があり、同時期に発行された教科書の比較が出来て興味深い。1893（明治26）年の『郷土史談小学校生徒用』（著者三谷福三郎）は、「第1 尾道 第2 御調郡 第3 芸備 其1 備後国 其2 安芸国」の順に、郷土尾道から御調郡へ、広島県全体へと広げていく展開である。三谷は前書きで「歴史ノ趣味ヲ解セシメ 郷土ヲ愛慕スルノ情ヲ發揮シ 愛国心ヲ養成スル」として郷土愛と愛国心養成を前面に出している。本文の後に「復習問題」をつける工夫をしており、彼は同年に『郷土地理小学校生徒用』も刊行しており、郷土史と郷土地理のそれぞれを2冊に分けて発行している。『広島県郷土史談』（著者石橋臥波）は生徒用が30丁本、教師用が39頁本で1894（明治27）年に発行されている。生徒用は「発端 第1 歴史学ノ端緒 第2 続キ 総論 第3 起源沿革 第4・5 続キ 第6

土地人民ノ變遷、備後国 第7 各郡ノ事蹟、安芸国 第8 各郡市ノ事蹟 結論 第9 政治ノ沿革 第10 時勢ノ沿革 第11 商工業ノ沿革 第12 文学ノ沿革 附録 歴史年表」と内容がやや難解である。『広島県歴史』（著者早間恒）は1896（明治29）年発行で、緒言に「近きを密にし、遠きを疎にして、土地の遠近に寄せて順序を立てたり」と教授順序を書き、内容は「発端 1 歴史 2 広島高等小学校 3 広島城 4 浅野氏 5 頼山陽 6 広島 7 埃ノ宮 8 毛利元就 9 小早川隆景 10 福山城 11 広島県」の構成にしている。

芸備と銘打つ旧国別の郷土史教科書は、『芸備史談』（著者大戸尚胤）と『芸備地理歴史』（著者三谷福三郎）、『芸備地理歴史』（編者石川臥波）である。大戸尚胤本は、1894（明治27）年発行で、上・下2編に分けて必ず説話を挿入している点に特徴を持つ。内容構成は、上（1～24頁）一総説、第1 芸備両国ノ沿革、第2 広島県ノ沿革、広島市、以下安芸国の各郡を、下（25～41頁）一福山市、以下備後国の各郡を説明している。三谷福三郎本は、1895（明治28）年発行で、地理学の概念から入り郷土地理と郷土史を緊密につなぐ教科書である。教授方法に工夫を置くことを重視しており、本文の後に必ず復習問題を掲げている。内容は4部構成で、「第一 地理ノ端緒 1 方位 2 距離 3 尺度 4 地図 5 教室 6 学校、第二 尾道 1 総論 2 境界幅員 3 戸数人口大字小字 4 地勢気候 5 官庁学校神社仏閣 6 生業物産 7 習俗 8 沿革、第三 御調郡（項目は第二 尾道と同じ1～8項目）、第4 広島県（同上）」となっており、尾道中心の郷土史・郷土地誌であった。

山口県は、明治10年代に近藤清石が『山口県史略』6巻本を1881～83（明治14～16）年に周防国・長門国に分けて発行し、1885（明治18）年には『靖献事蹟山口県史略附録』上・下を続編として刊行している。明治中・後期には、1893（明治26）年に教師用の『防長史談』と生徒用の『防長歴史談』の2種の発行にとどまっている。

島根県は、明治10年代に『出雲史略』1880（明治13）年が発行されていたが、明治中・後期には『小学校用島根県地誌史談』（後藤蔵四郎・足立鉄太郎共著）1894（明治27）年が確認できるだけである（デジタルライブラリー本は1897（明治30）年再版本）。「地誌史談」と銘打たれた同書は、「出雲国一宍道湖 松江市 松平直政 中海 広瀬尼子経久 山中幸盛 船通山 斐伊川 今市抜粋 素戔鳴命、石見国一浜田 石見ノ海岸 三瓶山 銀山 井戸正朋 郷河 高津川 津和野、隠岐国一西郷港 後鳥羽上皇 後醍醐天皇。島根県約説一位置区画 地勢交通 地味生業物産 気候 面積人口 沿革」という内容であった。郡市町村レベルでは、隠岐国知夫郡（知夫村）、能義郡、八束郡野波邑の3種がある。『能義史談』は、同郡広瀬高等小学校長内藤新が「本校ニ於テ郷土史談ヲ口授スル材料ニ供シ本校卒業生徒ノ自修（マ習）書ニ充ツル」として「郡中ノ人物事蹟」を主に扱った郷土の人物史を学ばそうとした。

鳥取県は、明治中・後期の生徒用教科書の発行は確認されない。教師用は『因幡国史談』（著者金居小太郎）1903（明治36）年、因幡国、伯耆国の両国を合わせた鳥取県郷土史の『因伯記要』1907（明治40）年の2種が出版された。『因伯記要』の内容は、「第1章 沿革 1 総説 2 神代と因伯二州 3 元弘の義挙 4 山名時代と尼子氏 5 織田豊臣時代 6 慶長以後の封土易置並池田光中 7 維新の活動人材の輩出池田慶徳 8 文教沿革の概要、第2章 地理、第3章 名所旧蹟 1 鳥取市 2 岩美郡 3 八頭郡 4 気高郡 5 東伯郡 6 西伯郡 7 日野郡、第4章 教育 兵事並社寺寺院宗教 第5章 勸業 第6章 財政 第7章 警察 第8章 各種団体」の構成であった。出雲神話に関わる神代史から始まり、郷土の偉人や統治者を中心にした郷土史である。前半が郷土史で、後半が郷土地誌となっている。

表2 中国地方の郷土史教科書

A 生徒用 B 教師用（教授用） C 学習帖 （以下の表も同じ区分）

＜岡山県＞	
1	『岡山県歴史』 原繁太郎 岡山・細謹舎 1893（明治26）年 A（東書）
2	『小田郡地誌』 満谷報一他編 私立小田郡教育会 17頁 1893（明治26）年 A
3	『都宇郡誌』 原繁太郎 岡山・細謹舎 24頁 1893（明治26）年 A
4	『岡山県地理歴史』 黒瀬重暉・斎藤敬止合著 仁科久造 1894（明治27）年 A（国研）
5	『岡山県浅口郡柏崎村誌』 中塚一郎 同左 16頁 1895（明治28）年 A
6	『岡山県地理歴史筆記代用』 八木美作夫編 仁科久造 21丁 1899（明治32）年 C
7	『小学岡山県地誌』 北村礼励次郎 岡山・細謹舎 21丁 1901（明治34）年 A（国研）
8	『岡山県誌』 教材研究会 景山書房 20丁 1904（明治37）年 A *赤磐郡内高等小学校の生徒用に編纂、1課2時間で教授、旅行体 総論 岡山県 上道郡・赤磐郡 和気郡・邑久郡 児島郡・都宇郡 吉備 郡 浅口郡・小田郡・後月郡 川上郡・阿哲郡・上房郡 真庭郡・苫田郡 勝田郡・英田郡 久米郡・御津郡 附地図 学校一覧
9	『後月郡誌』 私立後月郡教育会 五竹園書店 23頁 1906（明治39）年 A
＜広島県＞	
1	『郷土史談 小学校生徒用』 尾道・三谷福三郎 芸香堂 22頁 1893（明治26）年 A *御調郡尾道

- 2 『芸備史談』 大戸尚胤 積善館 47 頁 1894 (明治 27) 年 A
 - 3 『広島県郷土史談』 石橋臥波 教育書房 (吉岡平助) 30 丁 1894 (明治 27) 年 A
 - 4 『広島県郷土史談 教師用』 石橋臥波 吉岡平助 39 頁 1894 (明治 27) 年 B
 - 5 『高等小学地理歴史』 福田禄太郎編 広島・三木半兵衛 27 丁 1894 (明治 27) 年 A (国研)
 - 6 『安芸国豊田郡町村沿革誌』 高橋一雄 同左 18 丁 1895 (明治 28) 年 A
 - 7 『芸備地理歴史』 三谷福三郎 児玉芸香堂 41 頁 1895 (明治 28) 年 A
 - 8 『広島県歴史』 早間恒 三本文明堂 14 丁 1896 (明治 29) 年 A
 - 9 『芸備地理歴史』 石川臥波編 庄原村・林晋三 28 丁 1897 (明治 30) 年 A (国研)
 - 10 『広島県史談』 森田保之編 広島・積善館 1898 (明治 31) 年 A (東書)
 - 11 『広島県地理史談』 牛尾敬止 長轍二 23 頁 1898 (明治 31) 年 A
 - 12 『高田郡地理歴史大要』 高田中央高等小学校 山田平民堂 8 丁 1901 (明治 34) 年 A
- <山口県>
- 1 『防長史談』 卷 1・2 大藤^{がん}紘 博古堂 卷 1 (21 丁) 卷 2 (25 丁) 1893 (明治 26) 年 B
 - 2 『防長歴史談』 宮崎勇熊 博古堂 58 頁+年表 8 頁 1893 (明治 26) 年 A
- <島根県>
- 1 『小学校用島根県地誌史談』 後藤蔵四郎・足立鋤太郎 川岡清助 26 丁 1894 (明治 27) 年 A (国研) 1897 (明治 30) 年再版—国会本
 - 2 『知夫村沿革誌』 渡部周太郎 中村健太郎 26 丁 1897 (明治 30) 年 A
*隠岐郡
 - 3 『能義郡史談』 内藤新 野津倉三郎 43 丁 1901 (明治 34) 年 A
 - 4 『^{のなみむら}野波邑地誌』 渋谷武一郎 報光社 10 丁 1901 (明治 34) 年 A
*^{やつか}八束郡
- <鳥取県>
- 1 『因幡国史談』 金居小太郎 同左 74 頁 1903 (明治 36) 年 B
 - 2 『因伯記要』 鳥取県 314 頁 1907 (明治 40) 年 B

3 四国地方の郷土史教科書

明治中・後期の四国4県の郷土史教科書の発行は、表3のとおりである。徳島県は府県（旧国）レベル5種・郡市町村レベル1種（三好郡佐馬地村）で、生徒用3・教師用3であり、府県レベルは旧国名阿波国を冠した3冊の『阿波国文明小史』『郷土史談小学阿波国史』『阿波国史談』である。愛媛県は府県レベル4種・郡市レベル2種（東宇和郡・温泉郡）で、生徒用3・教師用3である。『愛媛県史談』生徒用は、1894（明治27）年の赤松三代吉著作本と1896（明治29）年本の赤松通赫著作本の2種がある。香川県は府県レベル2種・郡市レベル1種（西讃岐那珂多度）で、生徒用1・教師用2であった。高知県は、府県レベルのみ4種で、生徒用3・教師用1であった。東書文庫本は『阿波国史談』『愛媛県史談』生徒用（宮脇通赫著）『高知県史談』の3種があるが、国研のみ所蔵本は『愛媛県地理歴史』だけであった。国研には宮脇通赫『愛媛県史談』生徒用も所蔵されている。四国4県の郷土史教科書は、府県レベル15種・郡市町村レベル4種の総計19種、生徒用10・教師用9が確認できる。なお、四国地方では、明治10年代に『愛媛略史』と香川県玉藻郡史『玉藻略史』が1879（明治12）年に発行されていた。

徳島県では、教師用『阿波国文明小史』は、著者広島秀太郎が1891（明治24）年に発行したものである。緒言で「地理ニ府県地誌アリテ歴史ニ府県史ナキハ余ノ夙ニ憂フル所ナリ」と考え、「当国ノ沿革ニ関スル諸記録ヲ閲スルコト多シ」と述べ、「第1編 1章 総論 2章 上古史 国造時代、第2編 3章 中古史国司時代 1 新制度 2 仏教 3 文学 4 延喜頃ノ開化 5 豪族ノ起リ 6 藤原純友ノ乱 7 豪族田口氏 8 地名考証 9 古跡 10 年代表」という時代区分で叙述した。翌年の『郷土史談小学阿波国史』生徒用1892（明治25）年で、彼は上古史・中古史・近古史の阿波国統治者を中心の政治史を著した。「国造ノ時代ノ事蹟→国司ノ時代ノ事蹟→守護ノ時代ノ事蹟→蜂須賀氏ノ時代ノ事蹟」とした地方政治史であった。「歴史ヲ請求スルノ順ハ 先ツ自家ノ盛衰沿革ヨリ其町村ノ史ニ及ヒ然ル後本書ニ進ムヘシ」とし、「本書ハ余編纂ノ小学阿波国地誌ト併行シテ利用スルヘシ」と前書きに書いている。自家の沿革史から町村の歴史、そして国府県の歴史の順序で教えるべきだと主張するとともに、郷土地理の学習と密接に連携して教えるべきだとした。同県には、郡市レベルの三好郡佐馬地村誌と、徳島県教育会編纂『郷土地理歴史教授資料』が発行されている。

愛媛県は、府県レベルの郷土史として『愛媛県史談生徒用』の同名2種の教科書と『愛媛県地理歴史』（著者中嶋貞五郎）1902（明治35）年の3種がある。このうち前2者は、愛媛県師範学校教員赤松三代吉の1894（明治27）年本と著者宮脇通赫の1896（明治29）年の発行本である。宮脇通赫は、『愛媛県史談生徒用』で「児童の歴史的観念を啓き忠君愛国の素志を作るを以て本旨」とすると述べ、「高等小学校歴史科用

だが土地の状況により尋常小学校本科でも適用」として尋常科でも郷土史を教えることを勧めた。宮脇本の内容は、「第1章 愛媛県 第2章 神社 第3章 仏閣 第4章 古戦場 第5章 城郭 第6章 人物小伝 第7章 道後温泉 第8章 砥部焼 第9章 愛媛県庁 第10章 昔よりのありさま」で郷土の史蹟や神社仏閣を取りあげ、郷土の物産、生業なども含めた幅広い郷土教育の内容としている。郡市レベルでは、温泉郡と東宇和郡の2郡が愛媛県教育会郡支部会の編集で教師用を発行している。『温泉郡誌』は、「1沿革 2自然の部 3郡内の各町村誌」を内容とした温泉郡の各町村の郷土歴史と地理であった。

香川県では、『西讃府志』(仲多度同志会編)が西讃岐郷土史として1898(明治31)年に発行された。生徒用で郷土地誌に重点を置く『香川県地誌小学校用』は、1899(明治32)年に発行されているが、生徒用の郷土史談・郷土史の発行は確認できない。『香川県史』第1篇～第3篇上・下、年表、附録(全5冊)が1909～10(明治42～43)年に刊行されたが、明治後期からの府県史刊行の流れである。内容は第一篇が「第1期 国造時代記事 第2期 国司時代記事 第3期 鎌倉時代記事 第4期 自南北朝期 足利時代至豪傑割拠 第5期 自豊氏氏時代至徳川氏初期 第6期 徳川氏第3世以降」の時代史であり、第二篇が陵墓、人物、名勝古跡、第三篇が明治時代の香川県治沿革となっている。

高知県は、生徒用として『小学校用土佐史要』上・下(著者青木義正)1893(明治26)年、『土佐国史談』(著者上田虎雄)、『高知県史談』(著者青木義正)1894(明治27)年の3種の発行が確認できる。『小学校用土佐史要』上・下は、「巻上—第1章 上古ヨリ細川氏ノ時マデ 第2章 七族時代ヨリ長曾我部氏マデ 第3章 長曾我部氏 四国ヲ征スルヨリ其ノ滅亡マデ、巻下—第4章 山内一豊公ヨリ豊資公マデ 第5章 豊信公ノ時ヨリ廃藩置県マデ」という土佐国の統治者中心の歴史で描かれ、内容は治乱興亡の史実が多い。

一方、『土佐国史談』の内容は、「第1 地勢 第2 沿革 第3 英将長曾我部元親 第4 山内家ノ入国 第5 高知ノ起源 高知城ノ沿革 第6 本山一揆 第7 岡村十兵衛ノ義心 第8 山内豊雍ノ善政 第9 山内豊熙ノ卓見 第10 山内容堂ノ偉蹟 第11 吉田元吉ノ政略 第12 野根山騒動 第13 学事 第14 有村抱軒儒学ノ振起 第15 谷義有 南学ノ興起 第16 小倉政平父子ノ事績 第17～30(中略) 第31 宝永及嘉永の大震」である。郷土の統治者の事蹟と学問芸術、災害等を詳しく記述している。同書は郷土史の興味ある題材を取りあげているが、文語体で記述も難解である。著者上田は、「歴史的觀念ヲ啓クニ先ツ郷土ニ於ケル忠良賢哲ノ事蹟ヲ以テシ併テ修身科ニ関連セシムル」と書き、「小学校教則大綱」の趣旨に従って郷土史の人物史に関して修身科的な扱い方を強調している。

表3 四国地方の郷土史教科書

<徳島県>

- 1 『阿波国文明小史』上巻 徳島・広島秀太郎 黒崎静寿堂 121 頁 1891 (明治24) 年 B
- 2 『郷土史談 小学阿波国史』 広島秀太郎 黒崎精二 17 丁 1892 (明治25) 年 A
- 3 『阿波国史談』 阿波国教育会編 鋳崎瑞章堂 1898 (明治31) 年 A (東書)
- 4 『佐馬地村地誌 三好郡史』 近藤辰郎・田村佐源太 佐馬地村教育研究会 1899 (明治32) 年 A
- 5 『郷土地理歴史教授資料』 徳島県教育会 黒作静寿堂 1908 (明治41) 年 B
- 6 『徳島県誌略』 徳島・吉田章五郎 黒崎精二 155 頁 1908 (明治41) 年 B
 総説 徳島市 名東郡 勝浦郡 那賀郡 海東郡 名西郡 板野郡
 阿波郡 麻植郡 美馬郡 三好郡

<愛媛県>

- 1 『愛媛県史談 生徒用』 赤松三代吉 土肥久枝 48 頁 1894 (明治27) 年 A
- 2 『愛媛県史談 生徒用』 宮脇通赫 大和屋教育書房 44 頁 1896 (明治29) 年 A(東書・国研)
- 3 『愛媛県地理歴史』 中嶋貞五郎 東洋社 110 頁 1902 (明治35) 年 A (国研)
- 4 『東宇和郡地理歴史』 愛媛県教育協会東宇和部会 1905 (明治38) 年 B
- 5 『温泉郡誌』 愛媛県教育会温泉郡部会編 向陽社 1909 (明治42) 年 B
- 6 『愛媛県誌』 1910 (明治43) 年 B
 第1編 自然地理、第2編 人文地理、第3編 県内の地誌—宇摩郡 新居
 郡 周桑郡 越智郡 温泉郡 松山市 伊予郡 上鋤郡 喜多郡 西
 宇和郡 東宇和郡 北宇和郡 南宇和郡

<香川県>

- 1 『西讃府志』 大塚敏等編 那珂多度同志会 1898 (明治31) 年 B
- 2 『香川県地誌 小学校用』 香川県同窓会 宮脇開益堂 29 丁 1899 (明治32) 年 A
- 3 『香川県史』 第1篇～第3篇上・下、年表、附録 1909～10 (明治42～43) 年 B

<高知県>

- 1 『小学校用土佐史要』上・下 青木義正 教育書房 上(26 丁) 下(18 丁) 1893 (明治26) 年 A
- 2 『土佐国史談』 高知・上田虎雄 久保田祥然堂 47 丁 1894 (明治27) 年 A

- | | | | | | |
|---|---------------------|--------------------|---------------------|-------------------|-------------------|
| 3 | 『高知県史談』 | 青木義正 | 教育書房 | 1894 (明治 27) 年 | A (東書) |
| 4 | 『土佐紀要』 | 東宮殿下行啓 | 高知県奉迎会 | 1908 (明治 41) 年 | B |
| | 第 1 制度及事歴の概要 | 第 2 文教の沿革 | 第 3 名士略伝 | 第 4 学芸諸家 | 第 5 市邑名区 |
| | 高知市 | 吉川郡 | 高岡郡 ^{たかおか} | 幡多郡 ^{はた} | 土佐郡 ^{とさ} |
| | 長岡郡 ^{ながおか} | 香美郡 ^{かがみ} | 安芸郡 ^{あき} | | |

4 九州地方の郷土史教科書

九州地方では、明治 10 年代後半から明治 20 年代初頭に、『増補校訂肥後国史』1884～85 (明治 17～18) 年、『校正鹿児島外史』巻 1～5 1885 (明治 18) 年や、『筑前旧志略』上・下巻 1887 (明治 20) 年、『福岡市誌』1891 (明治 24) 年の発行が確認される。

表 4 から明治中・後期の生徒用の郷土史教科書の発行は、大分県 4 種、熊本県・鹿児島県各 2 種、福岡県・長崎県各 1 種と少なく、佐賀県・宮崎県・沖縄県の 3 県は発行が確認できない。教員用の郷土史においても、他地方に比べて発行数は少ない。九州地方では福岡県 6 種と大分県 8 種が多い方である。福岡県の 6 種はすべて府県レベルで、うち 3 種が福岡県、旧国名の筑前・筑後・豊前各 1 種で、生徒用 1・教員用 5 である。大分県は逆に 8 種のうち、府県レベル 1 種・郡市レベルが 7 種 (中津町・速見郡 2・日田郡 3・宇佐郡) で、生徒用 4・教師用 4 となっている。九州地方で確認できる総計 22 種の郷土史は、府県レベル 15 種・郡市レベル 7 種で、生徒用 10 種・教師用 12 種という分布である。国会図書館デジタルライブラリー本が大半であり、東書文庫本で『教科用書福岡県史談』『肥後史談』、国研本で『鹿児島史談』『訂正鹿児島史談』が確認できる。

福岡県では、生徒用として『教科用書福岡県史談』(野口援太郎・林十治郎共著) 1898 (明治 31) 年再版本の発行が確認できる。前年 1897 (明治 30) 年初版の可能性が高い。東書文庫本は 1899 (明治 32) 年 3 版で、国研本は 1898 年本である。教師用は明治 30 年代から『豊前志』、『筑前志』、『校訂筑後志』の発行が確認できる。『豊前志』は「1 総論 2 田川郡^{たがわ} 3 企救郡^{きく} 4 京都郡^{みやこ} 5 仲津郡^{なかつ} 6 築城郡^{ついき} 7 上毛郡^{かみつみけ} 8 下毛郡^{しもつみけ} 9 宇佐郡上^{うさ} 10 宇佐郡下」の豊前国の各郡歴史で構成している (豊前国の一部 8～10 は現大分県)。『郷土史誌』1901 (明治 34) 年は、福岡県郷土史で福岡日報掲載のまとめで、国会デジタルライブラリー本は上巻のみ。『福岡県全誌』上・下巻 1906 (明治 39) 年は、教師用としても膨大である。

長崎県では、『長崎小史』(著者井口丑二) 1893 (明治 26) 年が生徒用である。著者井口丑二は「長崎開化史」を編纂中に、「市内児童の為に略史を著すよう」に依頼された。戦国期から明治までの三百年間の長崎港の郷土史として「長崎氏、港の開始、珍

品奇物、切支丹教を禁ず」から「水道、露国皇太子、電気燈」まで平易の事実を記したと書いている。

熊本県では、生徒用で『肥後史談』(辻武雄編) 1894 (明治 27) 年と『肥後国史略』(私立熊本県教育会編) 1903 (明治 36) 年の 2 種が確認できる。前者は東書文庫本で、後者は国会デジタルライブラリー本である。『肥後国史略』の内容は、「1 国造時代 2 国守時代 3 守護地頭時代 4 菊池氏守護職時代 5 大友・龍造寺・島津三代肥後侵略時代 6 佐々成政時代 7 加藤清正・小西行長分封時代 8 加藤氏封地時代 9 細川氏封地時代 10 藩知事時代及廃藩置県後の肥後」の構成で、熊本の統治者中心の郷土史である。戦国期から江戸時代にかけて「大友・龍造寺・島津三代肥後侵略時代→佐々成政時代→加藤清正・小西行長分封時代→加藤氏封地時代→細川氏封地時代」と詳細に教えようと試みている。戦国時代の近隣諸国からの大名による肥後侵略時代を書き込み、豊臣秀吉政権時代の佐々成政、加藤清正、小西行長の記述も詳しい。

大分県は、県レベル 1 種・郡市町村 7 種が発行され、生徒用 4 種は日田郡 2 種、宇佐郡・速見郡各 1 種である。県国レベルの教師用『豊國小史』は豊前国と豊後国の歴史を全 64 章に描いている。

教師用『中津歴史』(著者広池千九郎) 1891 (明治 24) 年は、巻頭で郷土史の意義を説き、郷土史教育の意気込みを述べている。「地方歴史ノ効用」は「日ク編纂ノ材料ニ供スルコト、日ク其地方人民特別ノ経歴ヲ知ルヲ得ヘキコト」である。しかし「地方資料乏シク過去ノ有様ヲ弁知スルコトヲ得ズ 只 僅ニ曖昧ナル地方ノ史書類ハ総テ其一斑ヲ窺フノミ」と述べて、「完全ナル地方歴史ノ著述ハ実ニ今日本邦史学ノ改造其重キヲ覚ユルナリ」である。「余中津歴史素ヨリ地方歴史トシテ 斯ル重要ナル価値アルニアラザレドモ 若後二次ニ出ズル所ノ地方歴史ノ先導者タルヲ得バ望外ノ幸ナリトス」と、地域史編纂の先駆者たらんとしている。彼は中津郷土史を「豊前国沿革、上世紀(太古～天正)→中世紀(黒田・細川・小笠原氏)→近世紀(奥平氏)→新世紀(明治年間)」の 4 時代区分法で構成した。郷土史で上世紀→中世紀→近世紀→新世紀という区分法を採り、明治 20 年代半ばの早い時期に現在の「古代→中世→近世→近代」と同様の時代区分法を採用した。

次に郡市レベルの日田郡 2 種を見ていく。日田郡の『郷土史談』1895 (明治 28) 年は、日田郡高等小学校第 1 学年用に編纂したもので、同校は明治 20 年 7 月 10 日に開校式挙行、明治 23 年 11 月 3 日に御真影を奉戴している。同書は、学校史から始めて、隈豆歴史→日田郡歴史→地理と教えていく。歴史は、「太古穴居時代→上古 国 造 時代→中古王朝時代→豪族時代(八幡大神・大友永季・平家・元寇・日田大友氏)→戦国時代→徳川時代・日田代官→明治維新、日清戦争」と内容を構成している。一方、『日田郡

歴史』1895（明治 28）年は、『郷土史談』本の前半を省いており、歴史の太古穴居時代以降は同一内容である。

速見郡の『速見史談』1893（明治 26）年は、「本邦ノ沿革→杵築藩沿革→日出藩沿革→忠臣孝子ノ事蹟→著名ノ戦談→神仏ノ盛衰→天変地異→租税紙幣→旧藩制度→殖産興業→風俗世態→旧藩ノ雑記（以下略）」と、江戸時代中心の記述となっている。また、宇佐郡の『郷土史談』1896（明治 29）年は宇佐郡郷土史として、「太古→菟狹津彦→宇佐八幡宮→宇佐宿尼→三十六士→貞姉→赤尾丹左衛門→御許騒動→明治ノ人物」をトピックに取りあげている。3 郡の郡史教科書は、それぞれに特徴を持っていて興味深い。

鹿児島県では、生徒用 2 種が発行されている。波多市松著『鹿児島県史談』1895（明治 28）年と『訂正鹿児島県史談』1899（明治 32）年であり、後者の鹿児島私立教育会編本は「訂正」と冠して、前者の波多本の修正版であるとしている。しかし、内容構成は大幅に異なるものである。『鹿児島県史談』は 25 丁で、「第 1 課 郷土史談 第 2 課 可愛ノ山陵 第 3 課 高屋ノ山稜 第 4 課 吾平ノ山陵 第 5 課 高屋ノ行宮 第 6 課 鶴嶺神社 第 7 課 武田神社 第 8 課 松原神社 第 9 課 島津義久公 第 10 課 徳重神社 第 11 課 島津家久公 第 12 課 照国神社 第 13 課 島津久光公 第 14 課 西郷隆盛・大久保利通 第 15 課 僧月照 第 16 課 鉄砲 第 17 課 煙草 第 18 課 甘薯 第 19 課 鹿児島県沿革の要 島津家御歴代表」の内容で、郷土の統治者とその事績、神社の由来、地域の特産品や産業が中心である。

『訂正鹿児島県史談』は 18 丁で、『鹿児島県史談』の前半部を大巾に省略する反面、幕末から明治維新の史実を詳述している。「琉球征伐」の内容は江戸時代初期の薩摩の琉球侵攻の史実で、島津家久が家康の許可を得て侵攻したとしている。『訂正鹿児島県史談』は明治維新前後の記述がより詳しい。西郷隆盛に関して、1877（明治 10）年 1 月から 9 月末までの西南戦争を「10 年の役、丁丑の乱」として簡単に記述する反面、西郷が許されて 1889（明治 22）年 2 月 11 日に正三位を受贈したことを詳しく書いている。『訂正鹿児島県史談』は高等小学校歴史科用で、1 学年 35 週の前半 17 回に充てるとして、「第 1 鹿児島 第 2 島津忠久 第 3 桂庵 第 4 島津貴久 第 5 島津忠良 第 6 鉄砲 第 7 島津義久 第 8 島津義弘 第 9 薩摩焼 第 10 新納忠元 第 11 琉球征伐 第 12 調所広郷 第 13 島津斉彬 第 14 島津久光 第 15 英艦の来寇 第 16 西郷隆盛・大久保利通 第 17 甘薯 第 18 煙草 第 19 鹿児島県の沿革」の内容とした。

佐賀県、宮崎県、沖縄県の郷土史は、生徒用教科書の発行を確認できない。

佐賀県の『佐賀県誌』（佐賀県教育会編）1900（明治 33）年は教師用で発行されている。巻頭に「郷土史談ヲ授クルニ当リ教師ノ参考ニ供スル目的トセシモ本邦歴史ヲ

授クル際 吾カ郷土ト連絡セシムル材料タラシメンコトヲ期セリ」として、「1 本県
来歴 2 国号 3 県名 4 旧藩 5 藩治沿革 6 三養基郡 7 神崎郡
8 佐賀郡 9 小城郡 10 東松浦郡 11 西松浦郡 12 杵島郡 13 藤津郡」の
内容を記載している。

宮崎県は、生徒用、教師用とも現段階では発行が確認できない。郷土地誌教科書の『宮崎県地誌』1896（明治29）年が刊行されており、郷土史が発行されている可能性は高い。第1編郡誌で「宮崎郡 南那珂郡 北諸県郡 西諸県郡 東諸県郡 児湯郡 東臼杵郡 西臼杵郡」をあげ、第2編県誌で概論、沿革を学ばせている。

沖縄県も、宮崎県同様、生徒用の発行は確認されない。

表4 九州地方の郷土史教科書

<福岡県>	
1	『教科用書福岡県史談』 野口援太郎・林十治郎 博多・教育書房 1898（明治31）年訂正再版 A（東書・国研）
2	『豊前志』 中津・渡邊重春 渡邊重兄 1899（明治32）年 B
3	『郷土史誌』上巻 藤野磯雄 山田純一郎 144頁 1901（明治34）年 B
4	『筑前志』 福本誠 国光社 403頁 1903（明治36）年 B
5	『福岡県全誌』上・下巻 古田隆一 安河内喜佐吉 1906（明治39）年 B
6	『校訂筑後志』 杉山正伸・小川正格 本庄知新堂 1907（明治40）年 B
<佐賀県>	
1	『佐賀県誌』 佐賀県教育会 河内汲古堂 48丁 1900（明治33）年 B
<長崎県>	
1	『長崎小史』 井口丑二 鶴野書店 49頁 1893（明治26）年 A
<熊本県>	
1	『肥後史談』 辻武雄編 東京・普及舎 1894（明治27）年 A（東書）
2	『肥後国史略』 私立熊本県教育会 1903（明治36）年 A
<宮崎県>	
<大分県>	
1	『中津歴史』 広池千九郎 同左 1891（明治24）年 B *下毛郡中津町
2	『速見史談』 加藤賢成 同左 14丁 1893（明治26）年 A
3	『日田歴史』 小野藤太 同左 66丁 1894（明治27）年 B
4	『郷土史談』 杉野竹次 小野藤太 38丁 1895（明治28）年 A *日田郡
5	『日田郡歴史』 杉野竹次 同左 24丁 1895（明治28）年 A
6	『郷土史談』 宇佐郡高等小学校 坂本樸次郎 19丁 1896（明治29）年 A

- 7 『豊後御越町志』 熊谷禎二郎 同左 86 頁 1902 (明治 35) 年 B *速見郡
- 8 『豊国小史』 大分県 甲斐書店 248 頁 1907 (明治 40) 年 B

<鹿児島県>

- 1 『鹿児島県史談』 波多市松 吉田文弁堂 25 丁 1895 (明治 28) 年 A
- 2 『訂正鹿児島県史談』 鹿児島県私立教育会 同上 18 丁 1899 (明治 32) 年 A

<沖縄県>

- 1 『南島沿革史論』 幣原坦 富山房 234 頁 1899 (明治 32) 年 B
- 2 『琉球史の趨勢』 伊波普猷 小沢朝蔵 (博愛堂) 1911 (明治 44) 年 B

(参考資料) 沖縄県の琉球史

- 1 『琉球新誌』 卷上・下 大槻文彦 煙雨楼 卷上 (28 丁) 卷下 (25 丁) 1873 (明治 6) 年
 卷上一地誌 気候 地質 物産 国名 史記 系統、卷下一封貢 国体 人種 政体 歳計 農工 文教 風俗
- 2 『沖縄志略一名琉球志略』 伊地知馨 品川金十郎 32 丁 1878 (明治 11) 年
- 3 『琉球藩史』 卷 1・2 小林居敬 青江氏蔵梓 卷 1 (源為朝伝 11 丁・系図 3 丁+37 丁) 卷 2 (51 丁) 1874 (明治 7) 年
- 4 『南島対話』 上・下 沖縄県 上 (46 丁) 下 (50 丁) 1880 (明治 13) 年
 *沖縄方言と日本語標準語の対照本。
- 5 『南島記事』 上・中・下・外編乾・坤 5 冊 後藤敬臣・西村捨三 石川治兵衛 上 (38 丁) 中 (45 丁) 下 (55 丁) 外編乾 (50 丁) 坤 (53 丁) 1886 (明治 19) 年
 上一天孫紀、舜天紀、英祖紀上・下、察度紀、尚思紹紀上・下、中一尚円前紀 上・中、下一尚円前紀下、後紀上・下

5 西日本の 3 地方における郷土史教科書の特質

—中国地方・四国地方・九州地方の郷土史—

明治中・後期における西日本 3 地方の郷土史教科書の刊行状況を概観してきた。以下では、西日本の中国・四国・九州の各地方の郷土史教科書の類型化を試みて、地域的な郷土史教科書の特質を見ていく。

第 1 の類型は、郷土史の目的を愛郷心の育成に置き、愛国心の養成と強く結びつける郷土史教科書である。広島県の『郷土史談小学校生徒用』がその典型であり、尾道

への愛郷の念を愛国心へと結びつけて編纂している。「小学校教則大綱」の趣旨に従うタイプであるが、明治20年代後半期はまだ郷土史教科書の多数を占めていない。

第2の類型は、郷土史を地域の統治者や支配的な人物史の変遷から描く類型の教科書である。郷土史教科書の多数がこの類型に属している。この類型には、郷土史の時代区分として統治者の支配時期から行っているものと、中央による地方支配の形態や体制で区分しているものがある。前者は、鳥取県の『因伯記要』のように、神代→元弘の義挙→山名氏・尼子氏→織豊時代→池田光中→維新期の池田慶徳という区分の郷土史であり、後者は徳島県の『郷土史談小学阿波国史』のように、上古史・中古史・近古史と区分して国造時代→国司時代→守護の時代→蜂須賀氏の時代とする郷土史である。

日本全体の中央の統治体制とかかわらせて、郷土の支配者である戦国大名や江戸時代の旧藩主の人物名が取りあげられるのは、生徒にとって親しみやすいからである。

『土佐国史談』は、「英将長曾我部元親→山内氏入国→高知城→本山一揆→岡村十兵衛ノ疑心」と続けて以下は江戸時代の藩主山内家の主要人物名をあげている。四国地方と九州地方の各県の郷土史にはこの類型が多い。熊本の『肥後国史略』は2者の融合の時代区分で、「国造時代→国守時代→守護地頭時代→菊池氏守護職時代→大友・龍造寺・島津肥後侵略時代→佐々成政時代→加藤清正・小西行長時代→加藤氏封地時代→細川氏封地時代」としている。これは他県からの侵略とその抵抗や反攻に力点をおいて描く郷土史である。

第3の類型は、郷土地理と緊密に結び付けて郷土史の内容を描くもので、地域の産物、生業、神社仏閣、史跡を書き込み教えていく郷土史である。『鹿児島史談』では、最初に郷土の山陵、行宮、著名な神社、ついで島津家の開祖、明治維新期の藩主、西郷・大久保・月照の人物を書き、鉄砲、煙草、甘薯^{かんしょ}を書いている。『愛媛県史談』では、郷土の著名な神社仏閣、古戦場、城郭、次に人物史、道後温泉、砥部焼^{とべやき}と続けている。

郷土地理との連続性で教える意識で書かれた郷土史は、「地誌史談」と銘打つ郷土史が多い。『小学校用島根県地誌史談』は、出雲国の宍道湖・松江・松平直政・中海・尼子経久・山中幸盛という展開形式で石見国から隠岐国へと移っていき、自然地形・郷土の人物・生業を描いている。この点では「小学校教則大綱」の趣意を忠実に踏まえた教科書といえる。

第4の類型として、生徒に身近な歴史である家族史、学校史から町村史へ、郡市から府県（旧国）史へと叙述する郷土史がある。府県レベルよりも郡市町村史の郷土史ではこのタイプが多く、大分日田郡『郷土史談』は、学校史→隈豆の歴史→日田郡歴史・地理と教えている。歴史の時代区分では、太古穴居^{たいこけっきょ}→上古国造→中古王朝→豪族→戦国→徳川→明治維新と展開している。石器時代から始める考古学を取り入れた郷

土史教科書は、西日本では少なく同書が唯一である。また、出雲神話にふれる『因伯記要』を除けば、神話時代から始める郷土史も少ない。中国地方・四国地方では、国造時代から始めて中央の統治形態の変遷に対応して地方政治史が変化する郷土史を描くものが多い。九州地方でもこの傾向は強い。検定期の郷土史教科書の叙述形態の主流であるといえよう。

最後に、九州地方の沖縄県の郷土史にふれておく。明治政府による「琉球処分」は、日本への強制的統合（併合）であるが、明治政府は1871（明治4）年に琉球を鹿児島県の管轄下におき、翌1872（明治5）年に琉球藩を設置させ独立させた。琉球藩では清国への帰属派が台頭し、これに対して明治政府は武力で押さえこみ、1879（明治12）年に琉球藩を廃止して沖縄県を設置する。沖縄県の郷土史は当初明治政府側から強制併合した立場から編纂されており、沖縄県民による郷土史の編纂は明治末期になる。

明治初期から明治10年代には、『琉球新誌』巻上・下（大槻文彦編）1873（明治6）年、『琉球藩史』巻1・2（小林居敬編）1874（明治7）年や、『沖縄志略一名琉球志略』（著者伊地知馨）1878（明治11）年、『南島対話』上・下が沖縄方言と日本語標準語の対照本で1880（明治13）年に発行された。これらは明治政府側の立場からの沖縄史であった。『南島記事』1886（明治19）年は琉球王国の王朝史を編纂したものであった。

『南島沿革史論』（著者幣原坦）が1899（明治32）年に刊行され、沖縄の郷土史としての先駆的な研究書であった。1911（明治44）年になって伊波普猷は沖縄人の立場から琉球郷土史の学習と研究を『琉球史の趨勢』1911（明治44）年で提起した。1907（明治40）年8月の沖縄県教育会講演「郷土史に就いての卑見」を本文35頁にまとめて附録8頁を加えた短編であった。同書は琉球史を沖縄人が自覚して学習・研究するうえで大きな影響を与えたといわれる。